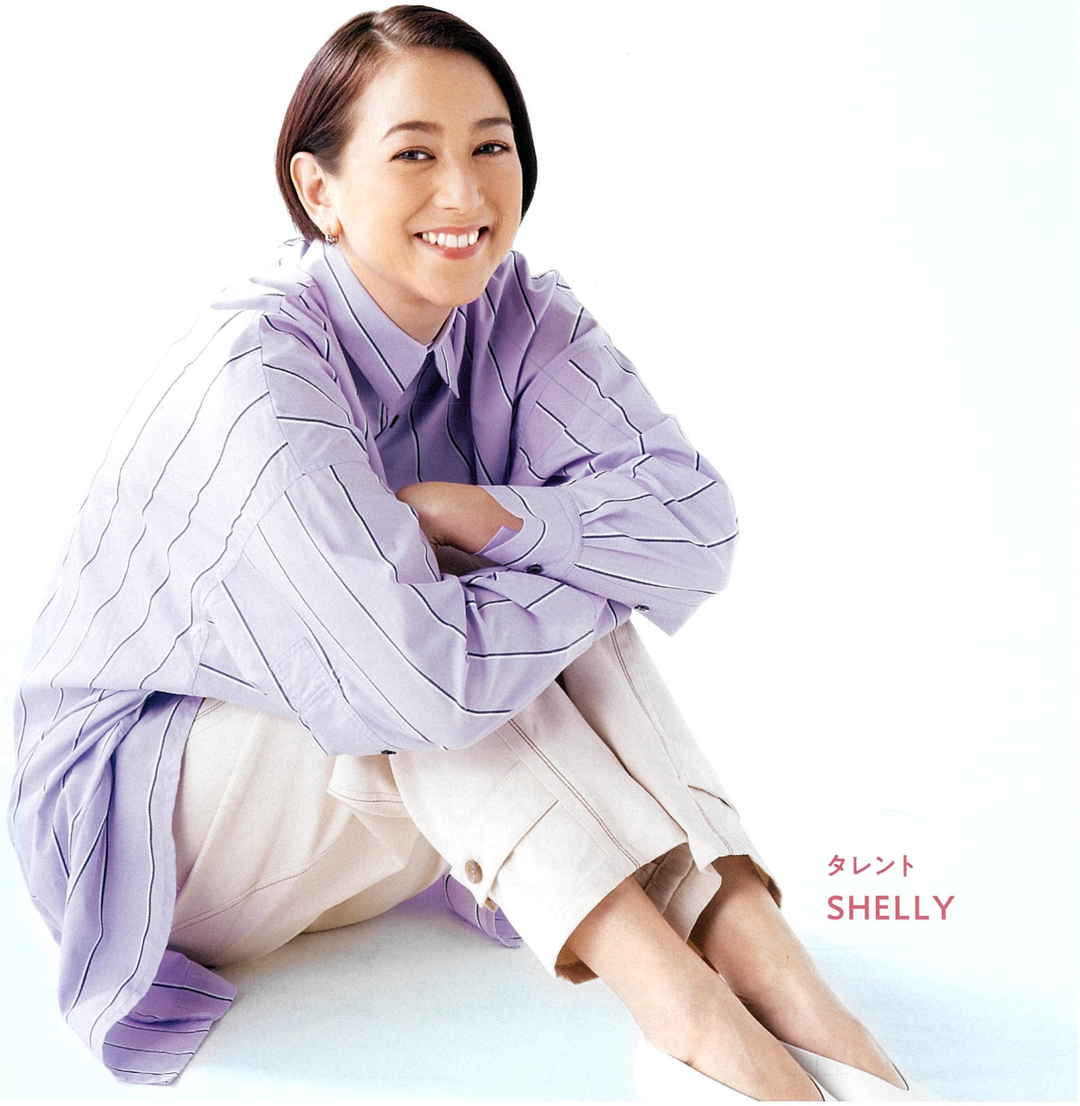
あたたかい家庭を必要としている子どもたちがいます

広げよう「里親」の輪

それぞれの事情で親と離れて暮らす子どもたち。日本には約4万5千人います。
そうした子どもを自分の家庭に迎え入れ、
さまざまなサポートを受けながら養育するのが「里親制度」です。



タレント
SHELLY

ひと、くらし、みらいのために
厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

あなたにできること、きっとある。

もっと知りたい、里親のこと

さまざまな迎え入れ方があります

養育里親
18歳未満の子どもを、家庭に戻るまでの間や自立するまでの間、養育します。期間は1年以内の短期の場合もあれば、それ以上の長期の場合もあります。

養子縁組里親
養子縁組を結ぶことが前提です。養子縁組が成立するまでの間、里親として一緒に生活します。

季節・週末里親
週末や長期休暇などに、数日から1週間ほど子どもを養育します。平日は子どもとの時間が取れない人や、最初から長期で養育するのが不安な人などに向いています。

子どもを迎え入れるまでの4ステップ

STEP1 相談
児童相談所や里親支援機関に相談を。里親の条件や手続きなどを説明します。

▶ **STEP2 研修・家庭訪問**
児童養護施設や乳児院などでの実習を含む数日間の研修と、家庭環境の調査があります。

▶ **STEP3 登録**
都道府県等の審査を経て、里親として登録されます。

▶ **STEP4 交流**
面会や数時間の外出、宿泊などで、子どもと一緒に過ごします。

▶ **子どもを家庭に迎え入れる**

養育に必要な費用が支給されます

子どもを育てるために必要な生活費、教育費、医療費などが支給されるので、安心して養育できます。

里親手当 ●1人あたり **9万円／月** ※養育里親の場合。

生活費 ●乳児 **約6万円／月** ●乳児以外 **約5万2千円／月**

※その他、教育費や医療費、防災対策費なども支給されます。

里親Q&A

Q 特別な資格が必要なの？
A 所定の研修を受け、子どもに適した住環境があるなどの要件を満たしていれば、特別な資格は必要ありません。保護を必要とする子どもに寄り添い、あたたかい愛情と正しい理解をもって接することができれば大丈夫です。

Q 共働きでも大丈夫？
A 基本的に問題ありません。ただし、子どもの養育に支障がでる場合は調整が必要なこともあります。親と離れて暮らすことになった子どもの気持ちに寄り添うことが大切です。

Q 実子がいても里親になれる？
A なれます。実の子どもに里親になることを伝え、理解を得たうえで、新しい家族を迎えるのが理想です。実の子どもの年齢や性別を考慮して、委託する子どもを決めることもあります。

里親制度について知りたい
朝日新聞デジタル 特設サイト
「広げよう『里親』の輪」
https://globe.asahi.com/globe/extra/satooyanowa/index.html

厚生労働省 里親制度 ｜ 全国里親会 ｜ 日本ファミリーホーム協議会

里親になりたい お近くの児童相談所にお問い合わせください。
児童相談所
相談専用ダイヤル 0120-189783（いちはやくおなやみを）
インターネット 全国児童相談所一覧

ひと、くらし、みらいのために
厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

里親 STORY

日本には、さまざまな理由により親と暮らすことができない子どもたちが約4万5千人います。子どもたちの心のケアと健やかな成長には、家庭に迎え入れられ、自分が愛されていると実感できることが大切です。子どもが置かれた状況に一つとして同じケースはないからこそ、里親にまつわる物語も十人十色です。

CASE 1 できるスタイルで里親を始めてみては

里親 中島善郎さん

2016年10月に里親登録し、これまでに22人の子どもの養育をしてきました。児童相談所が虐待や養育環境に問題があるとして一時保護した子どもや里親家庭で暮らす子どもを短期間預かる里親です。私たちは共働きなので、児童相談所にはなるべく学校に通える中高生ぐらいの子どもの委託をお願いしています。1年に5人ぐらいの子どもを受け入れ、半年ぐらいは我が家に子どもがいます。いつかは条件が整えば長期で養育里親をやろうかと夫婦で話すこともありますが、それ以外の経験として、いろんな年齢、性別の子どもと接したいと思っているからです。

妻は、最初の2年間ぐらいは、里親として子どもに「何かしてあげないと」みたいな感じで、すべての時間を子どもと関係を持って埋め尽くすようにしていました。実子でも、四六時中、親が何かを考えて時間を埋め尽くそうとしている家庭なんてありませんよね。例えばお弁当も毎日すべて手作りしていましたが、いまは冷凍食品も使ってあまりストレスがないようにしています。「そこまで頑張らなくてもいいよ」と夫婦でいえる関係が大切です。

35歳までアメリカで暮らしていた私には、「里親制度がいいことだとわかっていても目立つリスクがあるならやりたくない」というような日本のカルチャーを感じます。でも、「社会的養護が必要な子のためにがんばっています」と胸を張っていえるようになると、周囲の人たちも応援しやすくなると思います。世界を変えるような大きなことじゃなくていい、でもちょっと行動に移してもらえるだけで、大変な状況を経験している子どもの気持ちが少し楽になると思います。

PROFILE

なかじま・よしろう／1978年、アメリカ・サンフランシスコ生まれ。妻の泰子（やすこ）さんとの結婚を機に35歳のときに日本へ。2016年に里親登録。善郎さんは自宅で貿易商をしている。泰子さんはメーカーに勤務。

CASE 2 親と暮らせない子どもは「特別な存在」と思っていませんか

THREE FLAGS-希望の狼煙- まこちゃん（山本昌子さん）

私はネグレクト（育児放棄）で保護されて、生後4カ月から19歳まで、乳児院、児童養護施設、自立援助ホームで育ててもらいました。児童養護施設は、一軒家で子ども6人と大人3人で生活するグループホームで家庭的な養護を実践していました。だから一緒に住んでいるみんなが私の家族という感覚でした。

私は学校が休みの期間、施設で暮らす子どもたちを家庭に迎え入れてくれる「フレンドホーム」（東京都の制度の名称）に通った経験があります。小1のときに「（施設の職員に）やってみる？」と聞かれて、「行きたい！楽しそう！」って即答して参加しました。2年間、3カ月に1回ぐらいの頻度で、お出かけしたり、泊まりに行ったりしました。いまだに連絡を取ってご飯に行ったりしています。

社会に出てみたら「施設出身の子に初めて会った！」みたいな反応をされたり、「もっと悲しい感じかと思ったら普通に明るくていい子でびっくりした」ってよく言われたりします。本当の姿を知られていないんです。同じように、里親さんのこともまだまだ知られていないですよね。

里親さんは、何かあったときに一人で抱え込まないで欲しい。里親さんの家族だけでなんとかするのは難しいこともあるだろうから、里親さんが集まる場など相談できる仲間とのつながりが大切だと思う。里親制度に興味がある人に伝えたいのは、「自分の家族が笑顔か」がまずは一番大事ということ。自分が楽しくて、自分に負担がないこと。それによって幸せが連鎖していくと思います。

PROFILE

THREE FLAGS -希望の狼煙-
児童養護施設で暮らした経験のある西坂來人さん（ライト）、山本昌子さん（まこちゃん）、ブローハン聡さん（BRO）が、自らの経験や考えを交えながら社会的養護の現状や課題を紹介し、視聴者と一緒に「私たちが今できること」を考えていく番組をYouTubeで発信するプロジェクト。

CASE 3 里親家庭の実子の気持ち

大妻女子大学准教授 山本真知子さん

両親は私が小学1年生のときに里親を始め、現在は複数の子どもを預かるファミリーホームを運営しています。これまで18人を養育してきました。私も子どもなりに家族と暮らせない子どもたちがいることは知っていましたし、家業は自宅で自営業をしていたので、家に血のつながらない人の出入りがあることは自然なことでした。

一方で、両親が里子の養育で悩んでいるのを知っていたので、自分の気持ちを両親になかなか話すことができませんでした。実子は里親制度の蚊帳の外に置かれがちですが、里子と同じ学校に通っている場合などは、学校も含めて親より長い時間を一緒に過ごすことになります。里親家庭にとって、実子も重要な家族の一員であるのは間違いありません。大学生ぐらいになると実子というよりは養育者側の立場になります。実子をチームの一員として認めてあげたほうがうまくいくという論文もあります。

養育里親を続けていくうえで重要な里親支援は何かと考えると、里親にも里子にも実子にも本音で話せるサポート役の人が必要だと思います。うれしいことも報告できて、その子の成長を一緒に喜べる人です。

虐待死の事件などが起きると、SNSには「うちにくればいいのに」というコメントがあふれます。里親制度はあるのに、本気で動く人はまだまだ少ないですよね。保護される一歩手前にいる子どもたちが世の中にはたくさんいます。子どもの命を救える制度がいまもあるんです。里親は専門的な知識が必要だと思っている人もいますが、そこは「きちんと支援があるから、ぜひ里親をやってください」と言える社会になってほしいですね。

PROFILE

やまもと・まちこ／1982年、東京都生まれ。大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科准教授。専門は子ども家庭福祉、社会的養護。2児の母。著書『里親家庭で生活するあなたへ 里子と実子のためのQ&A』（岩崎学術出版社）、『里親家庭の実子を生きる―獲得と喪失の意識変容プロセス―』（同）。

CASE 4 「負担」をシェアしてみんなで育てていきましょう

ファミリーホーム運営者 杉山敏憲さん、真由美さん

虐待など家庭環境の問題で、みなさんが考えるような「普通の家庭生活」を経験したことがない子どももいます。自分の感情をコントロールできなくなる子どももいます。私たち夫婦だけでは対処が難しいこともでてきます。そんなとき、仲裁に入ってくれて、諭してくれるサポートチームの存在は、里親やファミリーホームの運営者である私たちの大きな安心感につながっています。

子どもたちも、イライラしたら家の外に出てサポートチームに電話をして、話を聞いてもらって心を落ち着かせる練習をしています。里親やファミリーホームの運営者だからと、すべてを抱え込まず、みんなで育てていくという感じです。

また、「負担」に感じていることを養育者仲間とシェアしています。例えば、子育てをしていると、週末どこかに連れて行こうかと悩むことがあります。里親やファミリーホームの運営者も同じです。私たちは近くに住む養育者仲間が10家庭ほどいるので、「来週は○○公園に一緒に行こう」と相談することがあります。子どもたち同士で遊ぶし、悩んでいることを気軽に相談しています。里親やファミリーホーム運営者の自助グループのような形です。

かつて思春期の子どもを預かり、感情のコントロールができないことに戸惑ったことがありました。私たち夫婦だけで解決しようとせず、サポートしてくれるチームの力を借りることで子どももだんだん落ち着きました。この経験を通じて、人は変われるんだ、お手伝いができてよかった、と感じられるようになりました。それが、いま、ファミリーホームを運営する自信につながっています。

PROFILE

すぎやま・としのり／1967年、北海道浦幌町生まれ。社会福祉法人麦の子会職員。
すぎやま・まゆみ／1963年、札幌市生まれ。社会福祉法人麦の子会職員。
夫妻には近所で暮らす成人した実子が1人いる。里親を再開してからファミリーホームを運営する現在まで9人の子どもを養育してきている。

フォスタリングマークについて

里親制度を広めるとともに、里親家庭を社会で支えるための支援の輪が広がることを願って作られたシンボルマークです。

里親が育てる。
社会が支える。

特設サイト公開中!

朝日新聞デジタル 特設サイト 「広げよう『里親』の輪」 https://globe.asahi.com/globe/extra/satooyanowa/index.html